

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 136 号

2026年 3月



第 200 回観察会・高山山麓・仁田沼自然林観察会

第 200 回高山の原生林を守る会・高山山麓・仁田沼自然林観察会を実施しました。参加者は 20 名でした。

記念すべき第 200 回の観察会には、岩手県西和賀町「カタクリの会」から瀬川強さん、陽子さん、匠さん、そしてお仲間の菅原やよいさんが参加してくださいました。また、県内からも日本自然保護協会のネイチャーナビを通じてこの観察会を知った田村市、西郷村の方々が参加され、新鮮で多様なメンバー構成となりました。

今回は代表がケガをしたため、瀬川さんにガイドをお願いしました。瀬川さんファミリーの 3 人は、第 47 回麦平観察会にも参加されており、その際には瀬川さんが自筆のイラストを用意して森の解説をしてくださいました。イラストの素晴らしさに大変感動したことを覚えています。

そして今回も、あの日と同じように自然観察のイラストを準備して説明してくれました。参加者の皆さんは、当時の私と同じ感動を味わったことでしょう。

観察会を終え、仁田沼から戻ってきた皆さんの表情はとても満足そうでした。これぞ、まさに“ケガの功名”と言えるのかもしれません。

遠く岩手から駆けつけてくれた瀬川強さん、陽子さん、匠さん、そして菅原さんに、心より感謝申し上げます。昨年の奥田さんの追悼観察会に引き続き思い出深い観察会となりました。



自筆のイラストで冬芽を説明する強さん

森がつかない縁と学び
～40周年・第200回仁田沼観察会～

(岩手県・西和賀町)瀬川陽子

40周年・200回観察会、おめでとうございます。

高山の会とは、1993年秋の東北自然保護の集いで知り合いました。その時に「当会の自然観察会に参加しませんか」と声をかけたところ、翌年から参加いただきました。それがきっかけで、高山の会も観察会を始めるようになったとのこと。200回目の記念観察会、とても楽しみにまだ雪が50センチもある西和賀町より出かけました。

朝9時のオリエンテーションでスタート。生憎代表の佐藤さんは足を怪我して歩けないというので、私共も観察会のお手伝いをさせていただきました。

最初に見つけたのは「キブシ」。西和賀にもあるキブシは、木付子(木五倍子)と漢字で書き、黒の染料として使われた歴史があるとか。それから木の髓を抜くことができるので、西和賀では「ずぼのき」とも呼ばれ、子供たちが遊んだと紹介しました。

赤松や檜の薄暗い林を抜けると、一転して明るい落葉広葉樹林。クリ・サワシバ・ブナ・サルナシ・・・あ！知っている木が多い！遠く離れた仁田沼が身近に感じられました。

「アワブキ」という声。アワブキは西和賀にはありませんが、花巻の林で、その葉にスミナガシの幼虫がいたのを見たことがあります。参加した会員さんに昆虫に詳しい人がいて、スミナガシの話をしてくれました。一つの木から、それぞれの物語を聴くのも大好きです。

太いケヤキも、ここの森の大きさを感じさせてくれます。

そして湿地に到着。今頃は雪があって、もう少しハンノキの傍まで歩けるんだけど・・・ということでした。でも雪はなく、湿地のほとりから眺めました。満開のマンサクが、出迎えてくれました。

その時11時半。あらもう2時間も歩いたのね。これからお昼までに駐車場に戻れるだろうか？と不安になりました。ところが、帰り道はたったの!!15分で駐車場に。え？こんなに手軽な場所だったの？

いただいたハンドブックはカラーで、詳しく丁寧。もっと勉強しなくては、という気持ちになりました。

(Photo by F.Nonaka)



キブシ



明るい落葉広葉樹林



仁田沼のハンノキ林
(去年は雪で覆われていましたが)



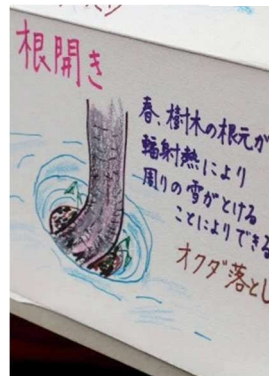
なんか見つけた



ターザンか？



自然観察紙芝居



オクダ落とし



木材腐朽菌の仕業？
傘のように広がるのは
珍しい

高山の原生林を守る会の雪上観察会に参加して

金澤隆夫(西郷村)

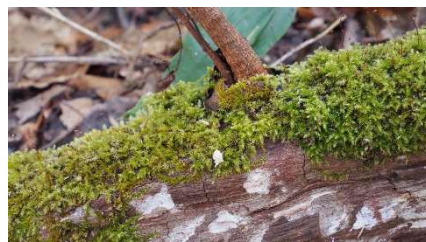
日本自然保護協会の会報「自然保護」に今回の観察会が紹介されているのを見て初めて参加しました。

令和8年3月1日午前8時30分に仁田沼駐車場に集合。講師は、岩手県西和賀町の瀬川さんご夫妻でした。瀬川さんは、西和賀町でカタクリの会の代表を務めており、毎月1回の自然観察会を30年以上も開催しているとのこと、また高山の原生林を守る会の観察会も今回で200回を迎えたとのこと、本当にすごいことだと思います。頭が下がります。

駐車場を出発して間もなく、キブシの説明があり、枝の中心部分の髓が柔らかく抜けることが分かりました。この後、瀬川さんは、冬芽などの仕組みを手書きの絵で分かりやすく説明していただきました。残雪期に太い木の根の回りが深くなる根開きについて、瀬川さんたちは、昨年3月に亡くなった奥田博さんに因んで「奥田落とし」と呼んでいるそうです。また、サルナシの蔓でかんじきを作るとの説明があり、ヤマブドウやツルウメモドキの蔓の肌と異なることを知ることができました。さらに、ウワミズザクラの実で身体にいい果実酒ができることやブナの葉の見分け方なども教えていただきました。ミズバショウの増やし方についても説明があり、今後仁田沼のミズバショウが増えていくことが期待できそうです。

この冬は降雪が少なく、遊歩道に雪がなく、雪上観察会ということにはなりませんでしたが、風がなく好天にも恵まれて、瀬川さんご夫妻の詳しく楽しい説明で、有意義な観察会となりました。

観察会の終わりに、瀬川さんから、多くの方が自然観察会に参加することにより、自然環境さらには自然保護に関心を持ってもらいたいとの話がありました。さらに、妻の陽子さんからは、他の人に話すことにより知識が身につくとの話があり、納得しました。私は、現在73歳となり、年齢を重ねるとともに記憶力が低下し、本や図鑑を見て分かったと思ったことでも、後になると、なかなか思い出せないということが増えてきています。できるだけ他の人に話すようにしていきたいと思っています。



アラハヒツジゴケかな



これは何？



マンサク



ウリハダカエデの樹皮で編んだ籠が大人気



観察会を終えて



西郷村と西和賀町が出会った



一人だけ視線が別



楽しそうに耳を傾けていますね

森とともに、これからも

長岡義人

高山の原生林を守る会・四十周年

二月二十八日、土湯温泉 YUMORI にて、「高山の原生林を守る会」四十周年ならびに二百回観察会を記念する講演会が開かれた。当日は多くの来賓と会員が集い、盛大でありながらも和やかな、実に楽しい会となった。

会はず、渡邊アヤ子さんによるオカリナ演奏から始まり「土湯小唄」や「エーデルワイス」などのやさしい音色が会場に流れると、冬の温泉場の空気がふっと柔らいたように感じられた。

続いて、高山の原生林を守る会の佐藤守代表が「観察会で見守ってきた福島 naturally」と題して講演を行った。長年にわたり原生林に分け入り、四季の移ろいの中で自然を見つめ、記録し続けてきた会の歩みが語られた。その言葉の端々から、森とともに過ごしてきた時間の重みが静かに伝わってきた。

次に登壇したのは、自然写真家の瀬川強氏である。演題は「賢治が愛したイーハトーブに魅せられて」。宮沢賢治が愛した草花とその精神世界との関係をひもときながら、命のつながりの不思議をやさしく解き明かしていった。

とりわけ印象的だったのは、スプリング・エフェメラル、カタクリの話である。小さな種子はアリによって運ばれ、芽を出し、やがて花を咲かせるまでに七年もの歳月を要するという。スクリーンに映し出された、演者いわく「一番の美人(?)」のカタクリの赤い花が現れたとき、会場には同感の笑顔が広がった。

二つの講演は、自然を見守り続ける人々の情熱と、命の営みへの畏敬をあらためて胸に刻むひとときとなった。

その後、交流会の準備の間、参加者たちは温泉に浸かったり、あちらこちらで談笑したりして過ごした。そしてやがて始まった交流会は、笑顔と語り合いのうちに、夜更けまで続いていった。

こうして節目の一日が過ぎていったが、あらためて思う。

私たちの活動は、こうした行事だけで成り立っているわけではない。

春の芽吹き、夏の濃い緑、秋の彩り、冬の静寂。

私たちは年五回、同じ山や森を歩きながら、毎回ちがう自然の表情に出会ってきた。

観察会で、何気なく交わすひと言。

「あの花は去年より早いですね」

「水の音が少し変わりましたね」

そんな小さな気づきが、この会の時間と空間をつくってきたのだと思う。

そして、その折々の風景や思いを、私たちは年四回の会報に記してきた。

活動そのものは一日で過ぎ去っていくが、文章にすると不思議と息をしはじめる。ページをめくれば、あの時の空気や光がよみがえる。会報とは、私たちの記憶をそっと灯す灯りのようなものかもしれない。



始まりはオカリナ演奏から



観察会で見守ってきた福島 naturally

「観察会で見守ってきた福島 naturally」



熱心に聞いていただきました



「賢治が愛したイーハトーブに魅せられて」瀬川強さん記念講演



廻戸小屋のカタクリ: 始まりはここから

では、これからもこの「高山の原生林を守る会」を続けていくためには、どんなことが必要なのだろうか。それは決して、特別なことではないのだと思う。

私たち一人ひとりが、「この会を続けていきたい」と思い、その気持ちをほんの少し行動に移すことではないだろうか。

観察会に参加すること。

気づいたことを一言でも会報に寄せること。

写真を撮って記録を残すこと。

新しく参加した人に声をかけること。

どれも小さなことに見えるが、その一つ一つが会を支える大切な力になる。

この会は、誰か数人の努力だけで続いてきたものではない。

四十年という時間は、多くの会員の関わりと支えによって重ねられてきたものだ。

だからこそ、これから先の時間もまた、**私たち会員みんなの手でつづいていきたい。**

自然は、急がない。

派手に主張することもない。

けれど、毎年きちんと芽を出し、葉を広げ、静かに季節を巡らせていく。

私たちの会もまた、その森の歩みに倣いながら、少しずつでもよいから、みんなの力を持ち寄り、この森を見守る歩みをこれからも続けていこうではありませんか。

「次の十年、二十年も、この森を共に歩く仲間でありたい。」



40周年記念事業お花リスト

松ぼっくり 50 セット(100 個)

ドライの花束 40 個

40周年記念年数

ハートユウカリ アヤメ ガンソク 唐辛子 ラベンダースティック 月桂

ドライアジサイ

(花びらが散らないので縁起物)

壇上の花

ミモザ (幸せを呼ぶ)

蘭 (縁起物)

ユーカリ 2 種 (風邪に効く)

桐 (鳳凰が住む木)

藪椿 ボケ ストック パンパース

月桂 (勝利)



乾杯！



賑やかに会食



交流会を終えて記念撮影

五十嵐礼子

9 マタ・アトランティカの樹木

(5)クアレズメイラ (*Pleroma granulatum* 旧学名:*Tibouchina granulosa* ノボタン科プレロマ属)

クアレズメイラ (Quaresmeira) はブラジルの大西洋岸森林 (マタ・アトランティカ) が原産です。「クアレズメイラ」という名前は、ポルトガル語で四旬節 (復活祭の前の 40 日間) を意味する「Quaresma (クアレスマ)」に由来します。これは、ブラジル (南半球) において、ちょうどこの時期 (2 月から 4 月頃) に満開を迎えるためです。プレロマ属はブラジルのマタ・アトランティカを中心とした南米東部に固有のグループです。

葉はノボタン科特有の、はっきりとした平行な葉脈 (縦脈) が 3~5 本走っています。葉は対生し、表面には細かい毛があり、少しざらついた質感をしています。

花は直径 5 cm~8 cm ほどの大きな 5 弁花を咲かせます。咲き始めは濃い紫色ですが、時間が経つにつれて色がわずかに変化し、紫色からピンクの花が混ざり、一つの木に異なる色合いの紫が混ざることがあります。

バズ・ポリネーション (振動受粉): クアレズメイラの葯 (やく) は、先端に小さな穴があるだけで、風では花粉が出ません。特定の周波数で羽を震わせるハチが訪れることで初めて花粉が放出されます。このため、特定の昆虫相との相互依存関係が非常に強い樹木です。

花色の変化: 咲き始めの鮮やかな紫から、受粉後や時間の経過とともに色が微妙に変化するのには、受粉媒介者 (ハチ) に対して「どの花に蜜や花粉が残っているか」を知らせるシグナルと考えられています。

イPPER、ジャカラダ、シビピルナ、パイネイラ、マナカ・ダ・セラと並んでマタ・アトランティカの代表的な花木です。冬に花が咲くイPPER、ジャカラダ以外の花はマタ・アトランティカのあちこちで花を咲かせていました。

(6) マナカ・ダ・セラ (*Pleroma mutabile* 旧学名:*Tibouchina mutabilis* ノボタン科プレロマ属)

ブラジル原産。サンパウロ州やリオデジャネイロ州に広がるマタ・アトランティカの山岳地帯 (Serra) を象徴する樹木として愛されています。クアレズメイラと同属の木ですがピンクの花に白い花が混じります。白い花は花弁の先からピンクに変わります。種小名の *mutabile* はラテン語で「変化しやすい」「変わりやすい」を意味し、花の色が変わる性質に由来します。

葉はクアレズメイラ (*P. granulatum*) に似ていますが、葉の表面の質感がやや異なり、一般的にクアレズメイラよりも少し滑らかで、縦脈が際立ちます。

マナカ・ダ・セラの花の色は、咲き始めは純白、中期になるとピンク色に変わり、終盤は濃い紫色 (または赤紫色) に変化します。このように、一つの枝に白、ピンク、紫の花が同時に咲き乱れるため、非常に華やかな印象を与えます。これは、アントシアニンの合成と pH の変化、あるいは受粉後の生理的サインとして色が変化すると考えられており、受粉を助ける昆虫 (ハチなど) に対して「この花は受粉済みである」ことを知らせる適応戦略の一環です。

開花期は、マナカ・ダ・セラが夏 (ブラジルでは 11 月~2 月頃)、クアレズメイラは秋 (同 2 月~4 月頃) にあたります。今回の滞在はちょうど 12 月~1 月でしたので、両方の花を楽しめたのは幸運でした。特に、マナカ・ダ・セラは、コクエーラの果樹園脇に自生しており、毎朝、花の色が変化していく様子に新鮮な驚きを覚えました。



クアレズメイラの樹冠



クアレズメイラの花



マナカ・ダ・セラの樹冠



マナカ・ダ・セラの花

アマドコロ (*Polygonatum odoratum* var. *pluriflorum* キジカクシ科アマドコロ属)

吾妻・安達太良山麓のクリ・コナラ林の比較的日当たりの良い山地の斜面や、明るい疎林の縁などに生育する多年草。これより大型のオオアマドコロは湿生地を好む。

葉は互生。葉形は長楕円形から楕円形で先端は少し尖っている。表面は明るい緑色で、裏面はやや白っぽく粉を吹いたような粉白色を呈する。葉縁は全縁、葉身には平行脈が走り、ユリ科の葉に似ている。茎が斜めに立ち上がる性質があるため、葉は水平よりもやや上向き、あるいは横に広がるように展開し、美しい階層状のシルエットを作る。茎には稜があり、茎断面は、はっきりとした多角形である。同じアマドコロ属のナルコユリの茎は丸いので識別できる。

花は腋生。葉の付け根から垂れ下がる花の数は 1 つの花柄に対して、1、2 個 である。これに対し、オオアマドコロは 3 個～5 個の花を着ける。筒状で先端が緑色の白い花を咲かせる。花冠の先端は 6 裂し、裂片は緑色を呈する。雄しべは 6 個で、花糸の下半分が花筒の内壁に合着している。アマドコロの花糸には、細かい突起状の毛がなく、滑らかである。これに対し近縁のナルコユリには微毛がある。葯の色は淡黄色である。雌しべの柱頭は弱く 3 裂し、雄しべより長い。

春の花が一段落し、木々の緑が日に日に濃さを増す頃、花を求めて安達太良山麓の森を歩いた。初夏の雨上がりの空気は澄みわたり、一帯には静かな清涼感が漂っていた。お目当ての花を楽しんだ帰り道、ふと足を止めた草地に、白と緑のコントラストがひととき美しいアマドコロの群落が広がっていた。釣り花を揺らすその姿は、まるで森の贈り物のようだった。あれは、まさに一期一会の光景だった。あの日ほど新鮮で、息づくように輝くアマドコロには、まだ出会えていない。

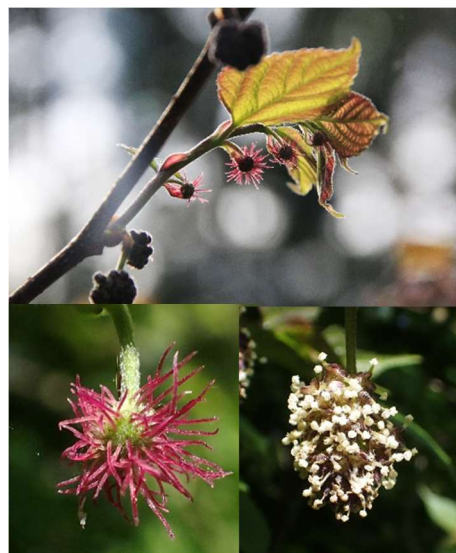
ヒメコウゾ (*Broussonetia kazinoki* クワ科ヒメコウゾ属)

吾妻・安達太良連峰のクリ・コナラ林の林縁、谷沿いの崩壊地、原野などに自生する落葉低木。先駆植物(パイオニア植物)的な性格を持ち、日当たりの良い攪乱地(土砂崩れの後や伐採地など)にいち早く侵入し、群落を形成する。古くから和紙の原料として利用されてきた「コウゾ」はヒメコウゾとカジノキの交雑種である。

葉は互生。葉は、同一株内で形態が変化する「異型葉(いけいよう)」としての性質を持つ。葉形は基本的には卵形で、縁には鋭い鋸歯を有する。しかし、徒長枝などでは、深く 3～5 裂する葉が多く見られる。これらの性質はクワと似ている。表面には短い毛が密集しており、触るとザラつく。

花は腋性。雌雄異花、雌雄同株である。枝先に雌花、基部に雄花を着生する。雄花は球形の頭状花序で風媒花である。雌花も球形で、表面から赤紫色の糸状の花柱が放射状にたくさん突き出ており、まるで「赤いくす玉」のような姿をしている。受粉が終わると、雌花の花序は全体が多肉質になり、6 月頃に直径 1、2cm ほどのオレンジ色の集合果へと熟す。果実は甘みがあり、鳥や小動物によって食べられることで種子が運ばれる動物散布(鳥散布)の繁殖戦略をとる。

カエデの花を追いかける日々を送っていたある日、私はよく足を運んでいた“秘密の花園”へと向かった。その入口で、目に飛び込んできたのは、鮮やかな赤い球状の花をまとった灌木だった。それまで見慣れていた樹木の花とはまるで異なるその姿は、胸の奥を一瞬でつかむほど鮮烈で、気づけば私はその花の魅力に捕らわれていた。それからというもの、毎年のようにその場所を訪れ、この花を觀賞するのを楽しみにしていた。



第201回自然観察会 山梨兜（栗子・明神道）・明神峠の春植物観察会

日時：2026年5月10日（日）8：00～16：00

集合場所 四季の里正面入り口駐車場

集合時間 8:00 参加定員 20名

内容 西栗子トンネル出口（福島側から）を起点として明神沢沿いの古道を散策します。明神峠を経て山梨兜までに植生する春植物と中止になった風力発電計画で伐採された跡地を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（500円）、申し込み：5月8日（金）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメール（florpomofores2105-1804@coral.plala.or.jp）にてお願いします（電話申込は午後7時～9時でお願いします）。

西吾妻登山道誘導ロープ設置&植生回復作業のお知らせ

（環境省の協力を得て、NF 米沢と共同で実施します）

照会・参加申込

6月4日（木）まで佐藤守へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時でお願いします）。

実施日と作業エリア

6月6日（土）西大巔（予備日7日）

集合時間・場所：7:00 グランドコススキー場駐車場

募集人員：15名（最低人員）

作業内容

- (1)ロープ設置：西大巔山頂から樹林帯までの区間
- (2)植生回復：昨年実施した「希望の庭」でのチングルマの挿し木とBSCシートの剥ぎ取りを行います。
- (3)保全作業：2025年に実施できなかった④、⑥、⑦にて土留めと石積み作業を行います。

6月13日（土）西吾妻山（予備日14日）

集合時間・場所：7:00 天元台湯元駅駐車場

募集人員：15名（最低人員）

作業内容

ロープ設置

人形石分岐～大凹、天狗岩～西吾妻山頂、天狗岩～

西吾妻小屋はネイチャーフロント米沢が分担

天狗岩～西吾妻小屋、若女平分岐～湿原、西吾妻小屋から南西湿原は一般ボランティア、高山の原生林を守る会他の参加者が分担

保全作業：ロープ設置終了後、参加者全員で行います。

注：天元台ロープウェイ運行開始日によっては6/20（土）（予備日6/21）に変更の可能性があります。



作業山域



2026年6月西大巔山頂直下崩壊斜面の重点作業か所

ボランティア作業に係るロープウェイ・リフト代を支援していただける方を求めています。ご協力いただける方は下記に振込をお願いします（通信欄に「ボランティア資金」と記載をお願いします）

郵便振替：02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

振込による会費の納入は、郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第136号 2026年3月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://adumatakayama.justhpbs.jp/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（1000円）を添えて上記まで

編集：佐藤